日本行動計量学会会報
第10号
1976年10月15日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
東京都文京区本郷7－3－1
東京大学医学部保健
学科疫学教室内

行動計量ヨーロッパ版雑感

戸田正直

永年主観確率の測り方とか効用の測り方とか、測り方の工夫ばかりしてきたのだが、かりにうまく測れた所でそれだけで人間の行動が解るわけのものでもなし、年も取ってきたからこの辺で測り方とはさっぱり絶縁、測らないでも解ったような気がする人間行動のモデル化を蛮勇を振ってやろうと思ってヨーロッパへ出かけたのだが、例によってこと志と反することになった。どういうわけか私はデシジョン関係の測り屋としてオランダでは名が通っていて…もっとも考えてみれば不思議でも何でもない。八年ほど前にハークの夏期学校で二週間程講義をした時、半分位は測り方の話をして、その頃の生徒達が今ではオランダ心理学界の中堅クラスになっている。そして面白いことに、オランダ人はとても方法論が好きである。オランダは大学数が少ない事もあって心理学研究室は大きく、千人から千五百人も学生がいるが、心理学部がいろいろの部門に分れていてその中に実験心理や臨床心理とならんで必ず方法論という部門がある。もっとも学生の志望選択が自由なこともあって、方法論部門は、臨床部門が八百人の学生をかかえている所で十五人位しかいない。スタッフの数より少ないのでそれじゃまるで天国ではないかとそれぞれ以外の方法は方法にあらずといった気概であった。こんな風だから連中はあんな滅茶苦茶な宗教戦争をやったんだろうし、又一方、そんな風だからこそ新しい仕事もどんどん出て来るのであろうと、こちらの受けとめ方も少々複雑にならざるを得なかった。

いずれにせよ日本人はどうせ妥協的に出来ているのだから、もう少しあの狂熱をとり入れても有益無害であろうと思われるのだが、さてどうしたらそれが可能か、私の雑な行動科学モデルからは解が出て来ない。

（日本行動計量学会理事・北海道大学文学部教授）

伝道士のようだし、コンジョイント・メジャメントやノンメトリック・スケーリングの連中は、それ云った所、方法論部門は文系全部のサービスの役割を持っているので、統計の講義はせねばならず、コンピューター。プログラムは書いてやらねばならず、そんなに暇なわけではないとの事であった。

いずれにせよ、そんな所から測り方について喋れとお義理にでも声がかかって来ると、日本人の悪癖でイエスイエスと云ってしまい、席のあたたまる暇がなく、今になって考えてみると一年間、蛮勇を振うはずであった初志はどこへ行ってしまったのかと汗顔の至りである。

お蔭でしかしいろいろ見聞はひろまった。どうせ頽は友を呼ぶわけで、私が見てきた所だけからヨーロッパの行動計量学全体の動向を類推しては危険が大きすぎるが、先日一寸のぞいた行動計量学会の方法論部門とはいささか雰囲気が違うようである。一口に云うと、良否は別として、彼等の議論には一種宗教的熱気がある。たとえばベイジアン達は皆殉教を辞さない

欧文誌・和文誌原稿募集

欧文誌 Behaviormetrika の原稿〆切りは十二月末です。

また和文誌「行動計量学」第五巻一号（来年九月発行）の原稿〆切りは、五十二年三月末です。ふるって御応募ください。

投稿の要領については既刊誌所載の応募規定を参照のこと。

第四回総会報告

実行委員長　奥野忠一

第四回日本行動計量学会総会は一九七六年九月二、三、四の三日間、東京大学経済学部の二つの教室を借りて開催された。参加登録した会員の総数は二一二名で、内正会員一七六名、準（学生）会員三五名、非会員一名であった。前回より一割増の二五〇名の参加を見込んで計画を立てたので、会計上は若干苦しい結果となった。

東京大学に理事が数名いるという理由からか、「第四回は東大で開催する」との理事会決定があって、下記メンバーが昨年暮から実行委員会を組織した。（工学部）南雲仁一、茅陽一、奥野忠一、伏見正則、中野馨、（医）山本俊一、柳井晴夫、高杉成一、（経済）竹内啓、（法）碧海純一、（文）安田三郎、直井優、（教育）芝祐順、（東洋文化研）関寛治、（新聞研）鮎戸弘の諸氏である。実務を担当する幹事には、柳井氏をはじめとして、伏見、中野、高杉、直井の諸氏をお願いした。

実行委員会は、大体月一回、総会日時と研究発表募集の通知、プログラムの作成、抄録集の印刷、会場設営などの業務の節節で開いた。

第一日の特別講演では、「食生活における人間行動」（田村真八郎氏）と（日本人の特徴と脳の働き」（角田忠信氏）のお話を伺った。ともに行動計量に直接結びつくわけではなかったが、現代人の関心の大きい話題を興味深く述べて頂いた。午後のパネルディスカッションは、「選抜試験における評価をめぐって」と題して、大学入試、国大協テスト、医師国家試験など時宜を得た話題について、パネラー同士、またフロアーとパネラーの間に活発な議論が展開された。座長の柏木繁男氏が熱心にリードされたが、参加者数が必ずしも多くなかったのは残念であった。

第二日からの十一セッションは「環境問題への行動計量学的アプローチ」、「医学診断における分類と選択」、「離散データのモデルと解析」の三つの特別テーマと、「医学・農学データの計量」、「心理社会的データの計量」、「教育データ等の計量」、「システム」、「方法論」の一般テーマに分かれ、合計五九件の研究発表があった。各座長の御尽力により、どのセッションでも活気のある討論がなされたと聞くが、筆者の出席した「離散データ」では、座長の丘本正氏の適切な誘導によって、非常に充実した討論がおそくまで続けられた。

いろいろ不手際もあって、御迷惑をおかけした点もあると思いますが、とにかく大過なく総会を終えることができたのは、偏えに、参加者各位の御協力と、実行委員ならびにアルバイト学生諸君の熱心な活動の賜と存じ、ここに厚く御礼を申上げます。

これだけ多種多様の分野の研究者が一堂に会する学会は珍しい。来年もまた、テーマの選定により一層の工夫をされ、学際的に、より多くの分野の人々にアピールするような総会をもたれることを期待します。

（第四回総会実行委員長、東京大学工学部教授）

会則の変更

第四回総会で、「日本行動計量学会会則」の一部が次のように変更された。

旧「2. 本会の事務局は東京大学医学部保健学科疫学教室に置く。」

新「2. 本会の事務局は統計数理研究所に置く。」

なお、この改訂は五十二年四月一日から施行される。

行動計量学シリーズ刊行企画委員会、第二段階へ

これからの学会の発展を支え、その原動力となるために、行動計量学シリーズ（仮称）の刊行が強く望まれていたが、刊行企画委員会（委員長林知己夫理事長）は、この一年余、回を重ねて、目的、内容、方法などを研究してきた。出版社はひとまずサイエンス社を予定しているが、出版形式は正確には固まっていない。今後、会員の皆様の御意見、御要望によって、漸次、著者・分野を決め、依頼してゆくが、まずは「シリーズ」が第一歩を踏み出すことに期待されたい。

（松原記）

会議議事録要旨

◇理事会（九月一日）
於　学士会館分館
出席者　理事　十名

1. 来年度総会開催場所については、山本理事（総会担当理事）が候補大学との細部の交渉に当たり、次回理事会で決定する。
2. 第四回総会の議長として、肥田野理事を推薦。
3. 事務局（東大疫学教室）を来年四月より統計数理研究所に移転することにし総会にはかる。
4. 学会運営における事務局の役割については従来明確でなかったが、この問題について今後継続して検討する。
5. 各種委員会報告（和文誌、欧文誌、運営委員会、シリーズ企画委員会）

◇編集委員会（九月三日）
於　学士会館分館
出席者　委員　二十一名

1. 和文誌編集幹事より、全体に和文誌原稿の応募状況が芳しくなく良い原稿を積極的に推挙して貰いたいむね要望があった。
2. 欧文誌 Behaviometrika の原稿締切りを十二月末日にすることを承認。
3. 今後の方針について
(1) 欧文誌を年2回発行する件については、現在の原稿の応募状況からみて、なお期間をおいて検討する。
(2) 欧文誌に日本語の論文タイトル、アブストラクト等を掲載する案について、今後の宿題として検討する。

◇運営委員会
於　学士会館分館
出席者　委員　十二名

1. 第六回講習会を「多次元尺度構成法の理論と応用」のテーマで、十一月十一～十二日の二日間、東京で開催する。講師は吉田正昭氏（中大・理工）で、テキストとして同氏著の「心理統計学」（丸善刊）を使用する。
2. 第十四回月例シンポジウムはSMCと共催で十一月に実施。第十五回は木下冨雄氏（京大・教養）をオーガナイザーとして十二月に京都で行う。テーマは「集合行動の解析」。
なお、月例シンポジウム担当係として、脇本和昌氏（岡山大・教養）を新たに加える。
3. 他学会との連絡組織作成に関して協力を依頼した会員より承諾が得られたむね広報係より報告があり、これを承認。会報に公示する。
4. 現在、活動中の小グループ研究会に事務費一万円を援助することを承認。小グループ研究会の発表抄録を会報などに掲載する案に関し今後検討する。
なお白崎和夫氏（東大・医）を小グループ研究会担当とする。
5. 地方部会の活動情況の報告。
九州地区の大里栄子氏（福岡女子短大）を運営委員に推薦する。

他学会活動の情報収集と会員への提供について

このたび会員への情報サービスとして本学会と関係の深い他学会の活動に関するニュースの収集と提供を行うことになり、特定の会員に“情報のパイプ役”をお願いしました。これらの方から担当学会の諸行事（シンポジウム、講演会など）に関する有益な情報を広報係まで連絡していただき、学会誌や会報を通じて会員の皆さんにお伝えする予定です。

協力者は次のとおりです。（敬称略）

心理	池田	央（立大・社会）
統計	駒沢	勉（統数研）
社会心理	広瀬	弘忠（東女大・文理）
O. R.	大隅	昇（統数研）
教育心理	芝	祐順（東大・教育）
数学	野崎	昭弘（山梨大・工）
情報処理	吉沢	正（山梨大・工）
医用電子	開原	成允（東大病院）
電子通信	藤田	広一（慶大・工）
公衆衛生	根岸	龍雄（東大・医）
循環器	白崎	和夫（東大・医）
人間工学	小谷津	孝明（慶大・文）
科学基礎論	西川	泰夫（上智大・文）
応用心理	近藤	暹（日立製作）
内科	宮原	英夫（北里大・医）
計量国語	江川	清（国語研）
民族衛生	豊川	裕之（東大・医）
社会	直井	優（東大・文）
計量経済	岩田	暁一（慶大・商）
政治	猪口	孝（上智大・国際関係研）
新聞	鮎戸	弘（東大・新聞研）
人口	山本	幹夫（帝京大・医）
Psychometric Soc.	印東	太郎（慶大・文）
Biometric Soc.	工藤	昭夫（九大・理）
Econometric Soc.	竹内	啓（東大・経）

月例シンポジウム案内

第十四回月例シンポジウムは、総合テーマを「あいまいさ」として、SMCおよびあいまいシステム研究会との三者共催で行われる。

（日時）十一月十三日(土)十時

（会場）東京工業大学

オーガナイザーは寺野寿郎氏（東工大）で、スピーカーには寺野寿郎氏、市川惇信氏（東工大）、江藤肇氏（筑波大）、中村和男氏（製科研）、谷田貝豊彦氏（理化学研）、総括討論者として林知己夫氏（統数研）が予定されている。

第十五回は、京都地区で十二月に開催される。総合テーマは「集合行動の解析」で、オーガナイザーは木下富雄氏（京大・教養）である。

（日時）十二月十八日(土)一時

（場所）京都大学楽友会館

スピーカーには、岡田光正氏（阪大・工）、安倍北夫氏（東外語大）、吉田正昭氏（中大・理工）が、指定討論者として安田三郎氏（広大・総合科学）、永田良昭氏（学習院大・文）が予定されている。会員の皆さんがふるって参加してくださるよう希望します。

行動計量学会にふさわしい？

会員の声　MH生

ある日A氏から電話で「行動計量学会って何をするの？学会にふさわしい論文てどんなもの？」と尋ねられた。実はその数時間前に同様の事をB氏からも尋ねられたばかりであった。

両氏が学会誌に投稿したところ、一人のレフリーは採録可であったがもう一人のレフリーが「これは行動計量学会にふさわしくない、他の学会の方がよいのでは」との意見で結局返却された。そこで〝ふさわしい論文とは〟という話になった訳であった。もちろん私に十分な答ができるはずもなかった。ただ私は「内容が貧しいというのではないのだから論文が学会に十分寄与するものである事を説明し再提出しては」と勧めた。

電話を切った後改めて少し考えてみた。結論めいた事をいえば、学会の設立目的である①最広義における人間行動の計量的研究とその方法を関心の中心に据え②各専門領域における研究を促進し③領域相互の交流を図ることに寄与するものが〝ふさわしい〟ということであろう。

各専門家の集まりである本学会であればこそ、上記の目的を達することができるのであり、その目的に寄与する論文はそれぞれの領域でも立派に通用する内容をもつものであり、それぞれの領域の学会にも十分ふさわしいものではないであろうか。〝ふさわしい〟範囲を性急に狭ばめ性急に「純化」することは、どんなものであろうか。たいへん難しい問題である。

後日談：A氏は再提出し、その論文は掲載された。B氏はレフリーの勧めに従って他の学会（彼の専門とする分野では最も権威ある学会）に投稿し、論文は掲載された。A氏の結果はA氏にも学会にもよかったと思う。B氏の結果はB氏にとっては良かったのでしょうが（なぜなら彼の本舞台とでもいうべき学会誌に載ったのだから）、学会にとってはたいへん残念なことであったと、私は思う。

（日本行動計量学会会員）

◇会員の声をどしどしお寄せください。　運営委広報係

編集後記

研究領域の高度の専門化と細分化は、その近くにいるはずの仲間にさえ意志疎通を困難にしている。やっていることも関心事も、いわば真暗闇の中にかくされているといっていい。傍目にわかることは、そこに研究者がいるということだけだろう（それもあやしいか）。まさに、ブラック・ボックスである。これが簡単なそれであれば、それほどまちがうことなく中をうかがい知れようが、相手が第一線の研究者と研究とあってはうかつにタタイテみるわけにもいかない。コミュニケーションしようにも同じ用語がこちらの思った通りには通用しないので、行動観察以外になかなかいい手段はない。なかんずく丸ごとの行動を生態学的に調べるチャンスとなると個人的なつき合いでもないとまずない。年一度の総会はまたとないチャンスとなろう。ここでは大いにタタイテ耳をすましてみたいものである。これに加えて当会報は研究誌にものせにくい本音と、気楽な話題の広場を提供する役目をになっている。会員の皆様相互の大いなる動きかけをお待ちする。（西川記）